

外城田 総合調査

古代史部会

外城田の古代の調査を任せられたわれ、五名は、三月二十七日から四月三日までの一週間、外城田小学校の好意を得て、そこを宿舎として、古墳を対象とするフィールド・ワークを中心にした、足でかせぐ調査を行った。現在整理は進行中で調査の結果を出すことは出来ないし、次時にゆすることにし、調査の経過報告として、二・三の向題点を紹介するにとどめたい。

外城田を中心にした原始古代社会を復元していくとき、外城田小学校に保管されている本地域出土の遺物と古墳の分布様相それに生産跡——須恵器の古窯趾群とが重要な史料として重要視されてくる。まず小学校保管の遺物とみると、一応、縄文、

弥生、古墳にわたる各文化期の遺物がみえているから、過去数千年、人々が生活の舞台として外城田に住みつけて来たことは疑う余地はない。それでは一体いつの頃から人々が当地に移り住んで来たのであろうか。奥義郎氏の話では縄文の遺物が発見せられた地点が現在二ヶ所——多気町宇田中の西側にのみある低平な丘陵と、玉城町の勝田池（大池）の西の丘陵——が知られている。事実学校にも縄文時代後期から晩期にかけての遺物であらうと思われる二・三片が、石器とともに蔵土されている。だが石器の中で注目されるべきは、スレードに似た打割がほとんどされたスレ縄文石器らしきものが本地域から出土している。しかし出土地層と関連づけて考え合せなければ、それがスレ縄文期に属するかどうかは判断できない。

この種の石器は外城田から西南の方向に位置する五ヶ谷村三ヶ野から出土を覚えている。たとえこの石器が縄文文化期に属するとしても、後期をばるかにさかのぼる縄文初期に位置づけられるものであろう。したなつて最初に足跡をのし込んだ人々が

採集経済集團として、当地域を生活の場にしたのは縄文時代初期の頃と考へても、不思議ではないし、それ以前という可能性もないではない。人々がここに住み始めてより、縄文期を通じて、どのように彼等の生活なりを向上せしめ、ついに採集経済に依存していただと考へられる彼等が、農耕文化を受け入れるようになつたかは現在詳にしない。だが、水稻耕作者ともなつた弥生文化の波及が、弥生初期にすでに当地にもあらわれてゐることは、弥生の初期の遺式土器片の出土からしてある程度首肯される。このように早くから農耕文化が受け入れられるには、それだけの客観的諸條件が当地にそなわつていなければならぬ。勿論主體的條件——農耕文化を受け入れるだけに晩期の縄文社会が廣的に發展していることと前提としていなければならぬ。だが、それと今は詳細に出来得ない。

上のことを考へると非常に参考になるのは、近藤義郎氏が「佐良山古墳群の研究」でのべられてゐる以下のことであらう。

「自立的には水稻耕作者に全く無経験であつたと考へられる人達にとつては、……播種地に、一つの限界があつたといふことが考へられる。おそらく彼等にとつては自然灌漑可能な新成沖積地、低湿地を、それに求める以外には、進んで灌漑排水の土木工事を行ふことなどは出来なかつたに相違ない。技術的には未熟さと、それに基く社会的諸條件とは少くともそのはじめのあいだ、彼等に一定の耕地のみより以外に与へることとはなかつたであらう。通常我々が遺式の名でよんでいる初期弥生文化の前半の全部の遺跡、及び後半の大部分の遺跡は、このことを表書きするように、一つの地形的環境

を同じくする土地に所在してゐる。その地形的環境は岡がといふと、それは單に標高が低いといふようなものでなく、その周辺または周辺の一部に自然灌漑可能な、即ち多大の人力を強固な社会的統制力の発動による灌漑乃至排水などの必要の全くない、又はほとんどない湿潤な低地、沖積地が繞つてゐるということである」(佐良山古墳群の研究)

しかして当地の人々も、おそらく以上のような状態と大差なかつたと考へてさしつかへないだらうから、いきおい自然の湧水を利用出来た低湿地を求めたらう。現在の外城田の水田を見ると、自然の湧水を利用した水田が多く、今でこそ外城田流域は二毛作地帯となつてゐるが、昔は葦が茂つていたという古老の語であつたし、又陶甎の土鏝が出土してゐること、考へ合せてみると、当地方は湿潤な地に恵まれ、水稻耕作の格好の地を人々に提供しただらう。それ故にこそ、早くから農耕文化が波及することになつたと思われる。

この地域で、農耕の開始とその後の一そうの発展と考へられる弥生文化の痕跡をまとめてゐるところは、前記丘陵の二ヶ所を含め六ヶ所備がめられてゐる。その弥生文化の具體的な様子はわからないが、多気町宇土羽茶屋に北面する丘陵の頂上に築造された推現山古墳から壺の滑石製模造品(石製模造品は中期古墳の典型的副葬品である)が出土してゐることからして、少くとも五世紀の半ば頃までに古墳を築造し得るほどに、階級社会を順調に發展せしめることができた。もうとも弥生社会からどのようにして古墳をつくることのできるであらう階級社会が、出現してくるが、問題となるのだが、現在論及することは避

けたい。古墳時代に入つてくると、前記した土羽茶屋に北面する丘陵に二墓（そのうち西に位置するのが権現山古墳）、玉城町字東原から東へ上向している丘陵の頂部の一墓（鴨塚と通称されている）計三墓が、古い様相をもつた古墳として注目されてよい。権現山古墳は、前記の石製模造を出しているから、おそらくとも五世紀後半までに出現した古墳と考へて間違いないだろう。しかし、外城田川の流域をへだて、二墓の古墳と対峙した恰好で築造されている鴨塚はいつ頃のものが、果して権現山古墳と並行するかどうか、それを判断する資料を手元にと欠く今、向題として残される。

この古式古墳が築造された時期は、朝鮮への征服戦争が大和朝廷を中心に遂行され、その間いを通じて、朝鮮の文物が盛んに吾が国に移入された時代にあたり、横穴式石室をもつた後期古墳もそれらの一つとして北九州にたちあらわれ、また、くに全国へ広がって行つた。当然その動きを明敏に感受してこの地域にも例外なく、後期古墳が急激に盛行する時期を迎え、一三〇余基の古墳が出現して来る。

その盛行のうちに、権現山古墳とが鴨塚に見られるようなハニツを囲繞させ、外観に力点を置き、権威を誇示するものとしての古墳の觀念が、この時期になると歪曲されもつぱら内部に重点を置き、しかも権現山古墳に副葬された壺の石製模造品のような儀礼的祭用品ではなく、日常茶飯な須臾器を副葬し、死者の来世を願う傾向を持つた觀念が、この地域社会内部にも生じてきたことと云うか、い知事事ができる。このことは、今まで古墳を築造し、自己を手厚く葬るだけの経済的力を持たなかつ

た人達が、被葬者階級として新しくたちあらわれ、従来の權威を否定して新しい觀念を創造していつた力強い姿を、われわれに想像させてくれる。

假令の興津城としての古墳は、外城田川をはさんで秉にのびる二丘陵、南の丘陵と北の丘陵に二大別される地域に分布している。

北の丘陵には現在、前方後円墳二墓を含む八七墓、南の丘陵は五十余墓、計一三七余墓を数え、大半が十五米以下の円墳である。注意すべきは両者の分布様相であろう。北の丘陵の山頂、山腹の一群の古墳は十五米内外がほとんどで、あまり顕著な差異を個々の古墳群、ひらびに古墳に見出されず、又うち五墓が横穴式石室の構造をもつていことから推して、横穴式石室を内部主体とした古墳であるらしい。一方、南の丘陵の古墳群は大きな円墳を中心にして、石室を持たないと考えられる小円（径十米内外で、現高一米程）がその周囲に点在して分布する様相をもっている。たとえば玉城町野篠部落、西の丘陵にある大塚古墳（径二十五米）を中心の小円墳。墓がその周囲につくられているのは、その典型的なものである。これを一体どのように理解したらよいのだろうか。南の分布様相は共同体内の有力者に弱少の被葬者達が隷屬している姿を想像しうるし、したがって新しく伸びようとする被葬者階級に共同体の規制力がないいた範疇ではないだろうか。だとすると、北の丘陵の古墳群は新興の被葬者階級が古い共同体の力を打破したことを表す分布様相であろうし、南の古墳群は假令が打破し得る牙をもちながら古い共同体の力に屈服する姿を想像せしめる。だ、以

上のように分布様相を認識したとき、外城田川とはさんで対立した勢力があつたと考えるべきか、それとも、この地域の社会体制の中に新しい要素が生み出されてくるとき、発展の道の相違と考えるべきなのか、向題となつてくる。この向題の解決の刀ぎは、南の丘陵のほゞ中央に位置している鴨塚の時代決定ではあるまいか。もし、北の丘陵の中央に築造されている権現山古墳と並行するなら前者のように、並行しないなら後者のごとく考え合され得るだろう。結論は急ぐべきでなく向題を提起するにとどめたい。

以上、向題点を述べるだけにとどめて、外城田周囲の遺跡・遺物の検討、現在までの資料の整理をし、文献史学からの撰取と相俟つて後の採合に調査の結果をまとめた。尚、この土地に不案内な私達に助力を指しきれなかつた奥義郎氏父子、並びに宿舍を快く提供していただいた外城田小学校の先生方、われわれの炊事をわすらわした小使いさんに、厚く感謝の意を表したい。今、奥義次君（現相可高校一年）の一文が手元に來ているから併せ載せたい。

（文責 中島登良男）

外城田綜合調査に参加して

奥 義 次

このたびの調査に、僕も同行させてもらい、いろいろ踏査しましたが、我が郷土に意外にも多くの考古学の宝庫があることに気がつきました。その宝庫を開くのが我々の役目であることはいふまでもありませんが、やはりどこを調査する場合でもそ

れに要する人員の数が当然問題になり、考古学の場合それが非常に少ないように思います。三重大学の人達も、それには大変氣をうかつたようです。又踏査した結果、盗掘などが数々にあり、その保存に万全を期してほしいと思つた。それでも先輩の話によると、遺跡および遺物などこれだけ残つているところは少ないそうだと。それには我々も、郷土の誇りに近いものを感ぜさせられた。

一日のうちでも徒勞に終つたことが幾度もあり、残念に思つたが、よい運動にもなつたし、調査の主旨からしてしようのないことだ。

それよりもううれしいことは、なんといつても、夢にも思わなかつた先輩と一週同という肉、毎日寝起きを共にし、いろいろ教えてもらい、よい友達になれたことが本当によかつたと思つています。そのせいか別れた寸前、非常にさみしく思つた。

調査した古墳の形態からいふと、円墳が断然多く、その側面白い形をしたものがあり、前期にあたる古墳が二・三あつたようです。そして外城田北部の古墳は石室のあるものが多く、南部のものはほゞいように思われることが印象深かつた。時々、山林内で迷子になり、帰宅したら羞暗かつたこともありましたが、調査のはじめは、先輩の後へついていただけで、言われることも判りませんでした。本などを見せてもらつてゐる中に、少しずつ理解出來てきて自分でもうれしいと思つたことがあり、今では、何故もつと始めから真剣に聞かされたのかと、後悔してあります。

又外城田の方へ来られましたら、よつて下さい。そして、こ

れからもどしく御指導下さい。おねがいします。

(相可高校生)